

村野次郎創刊

香蘭



2022年(令和4年)12月号

香蘭新人賞発表

第99卷

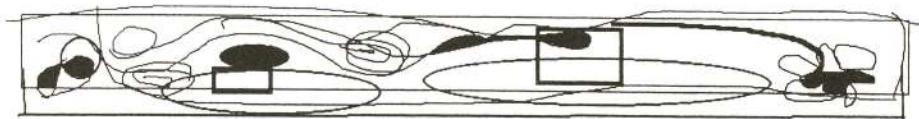
第12号

通卷1104号

二〇二二年(令和四年)十二月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十九卷第十二号



香 蘭

2022年(令和4年)12月号
香蘭新人賞発表
第99巻 第12号 通巻1104号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(88) 手塚 春世 : 表二
 近詠十五首 金太郎飴 長野 道子 : 2

一 4
 二 24
 三 37
 推薦香蘭集 45
 香 蘭 集 46

社 告 香山選者の解囑、高畠選者の委囑 朝香・石井・大井田・岡野・関口(静)・高畠
 作品一特選(十月号) 中村(か)・西野・松田・満木
 江口・小原・庄司・田中(あ)・松沢

作品二、三特選(十月号) 安田・小笹・川久保・能城
 千々和久 幸

村野次郎への旅(152) 香山 静子
 特別寄稿 私の道程 中村 よう子

一頁公論(19)「おもろい」ということ 加瀬 喜美江
 令和四年度 香蘭新人賞発表 牧野 道子

エッセイ・自由研究 身近な事からの短歌 飯 島 智恵子
 焦 点(十月号) 人生を詠う 宮原・脇谷・市川・三神

七 首 抄(十月号) 鈴 口 静子
 渡辺礼比子「横浜金沢称名寺」評(十月号近詠十五首) 川 原 優子
 作 品 評(十月号) 作品一 近 藤 美知子
 本田・中村(陽)

作 品 二 川 原 優子
 作 品 三 鈴 口 静子
 香蘭集 川 原 優子

緑 地 帯 田 中 あさひ
 耳言あれこれ(13) 脇 谷 房子
 他誌拝見124 川 久 保 百子
 明宝研究会第一三二回九月月例会 旅で拾った話 和 田 和 雄
 歌会及び会合・会員消息・他 78
 編集後記・新宿日記 表三

表紙絵 中村 陽子「浮遊」 目次・緑地帯カット 和 田 和 雄

村野次郎作品 私の愛誦歌（88）

地の上のもろもろの音降りしづめ

雪のゆふべのあかりただよふ

『樗風集』

『樗風集』の中の昭和六年の作である。

雪が降る夜は、回りの音を雪が吸い取るので、（と私は感じている）静かで物音が消えるのである。しんとして山の中に居るような気持になる。

「あかりただよふ」とあるので、風も絶えているのだらう。ひとりで雪の世界に生命を感じ、神秘さに包まれる。

他にも雪の景の作品はあるが、雪国に生まれ、寒さを嫌いながら、この年齢まで育てられ、生命をつないできた身には、この一首は納得して両手で胸に抱きとることが出来る。

心静かに自然に寄り添う生活が出来るように心がけよ、という反省を促す作品でもある。

老化のすすむ頭脳に溜息の毎日だが、心に大切なものを受け取る努力を忘れてはならない——わたくしには大切な一首である。

（短歌新聞社文庫『樗風集』71頁、『村野次郎三百首』には掲載されていない）

四 選 者 の 作 品

実りなき夏

平塚 千々和 久 幸

風すでに秋とう声を背に聞き妻恋坂を日暮れてくだる

鬼がいる天狗が龍が大蜘蛛も座敷の隅にほうと鬼灯

駅頭に喪服姿の社員らが狐のふりして提灯かざす

テンプラとう美少女ありき天麩羅を食う折々に思い出でつも

われのみが昨日と同じ夕焼けを見て海べりの町を後にす

実りなき夏惜しみつつ落花生の皮剥いているはぐれ雲見て

「ああそうですか歌」の数首か認めて夏の終わりの公園を出づ

近況を伝えて手紙の末尾には妻を見舞える一行ありぬ

しろさるすべり 東京 桜井京子

鉄砲百合のてつべんにまで登りたる蟬の脱け殻その先の空

藪枯らしにヘクソカヅラが絡みつき生きづらいのは私も同じ

蒲の穂のしげれる池のしづけさにくちなは入りて水をゆらせり

AIは神に近いといふやうな気もして来たりしろさるすべり

リビングをそよりと風の吹き抜けて猫には猫のさびしさがある

猛毒の短歌もあるべしうつつなる風にゆらげる野の曼殊沙華

古里の水辺に棲みぬし黄鶺鴒ゆめに来たりてしばらくを飛ぶ

百日を咲き続けるとぞ百日紅終はりの花のいまだくれなる

ふたつ満月 横浜 波 辺 礼比子

直撃と報道されし台風の逸れて歌会ひとつ吹き飛ぶ

病癒えしはずのわが見つ籠の目のごとく輝くふたつ満月

退屈な窓に見ており台風の余波なる雨がひた走れるを

忘れられているにはあらず とある日の母はおさなき我を呼びおり

消し忘れのFMラジオゆテノールがなにか悲痛に訴えはじむ

エリザベス女王の葬を記憶せん華麗な歴史の一齣として

バイエルを卒業せし日の達成感今に忘れず 沈むなよわれ

三時から手術を受くるといふ人に教わりており薔薇茶のレシビ

実朝祭・夏 鎌倉 高 畠 憲 子

集へるは三年ぶりなる実朝祭短歌大会に吹く杜の風

嘆きなき世を願ひける実朝にならひて詠まむ戦乱よ やめ

人を入れし今年の大会一席は香蘭の高田みちぢさんの歌

やさしかりし実朝からの賞ならむ連合ひを詠む一席の歌

タクシーは不要「妻と歩きます」講演終へたる穂村弘は

長くながく実朝祭を支へ来し香山先生に告ぐ今年の無事を

風呂敷の逸話ゆかしも会員の詠草包みし大貴先生

鎌倉のATMに貼つてある頼朝公の詐欺除けの札

作品一特選



(十月号作品から)

渡辺 礼比子 選

淑き人の

東京 朝香 ふさ枝

里芋の葉にたまりたる朝露で墨をすりにきいにしえ人は

七夕に硯を洗う風習を何時とも分かず続けてきたり

淑き人のよしとよく見て送りにくれし吉野葛で包む柿の冷菓よ

旧友の訃報知らせる電話の音が祇園祭りの話に及ぶ

大葉子の茂る空地に伏せをして立ち話を待つ小柴とパグが

百日紅の花のまぶしき川ぞいの門前に昨夜の送り火のあと

・三首目の本歌取りが巧。四、五首目にはシニカルな眼が働いている。

オキザリス

習志野 石井 雅子

良妻でなかつたかしらオキザリス咲くこの庭に置き去りにされ

可多於毛比万葉集にも詠はれて恋を恋する乙女なりにし

ヒール靴かたたんたと鳴らしつつ危ふけれども きみに会ひたい

祝日の一日もなき水無月はあつさりさつぱり過ぎてしまへり

イベントは起こらなかつたが確実に死に向かふ夫見守りてゐたり

・夫の没後時を経て、この作者特有の遊び心が戻ってきた。

猛 暑

川崎 大井田 啓子

炎昼の光の中に傘うかべ行方知らずのわたくしが行く

紺碧の空から猛暑が降ってくるへらへら白い笑ひ声あげ

七重八重の歌思ひつつ寄りゆけば零れむばかりの一重山吹

「迷つたら前へ進め」はこのばあひ会を辞めるといふことになる

猛暑日は今日も続くか卓上に昨日のフオークがにぶく光れる

水やりを終へたる庭に音もなく雨降り初めぬ盗人のやうに

・負荷の多い、緊張感に満ちた日常の中から、新境地を開いた。

白南風

尾道 岡野 甫江

怠惰また老いの身守るすべとして八十歳の我は知るべし

地震豪雨今年は戦もはじまりて地球のかたち歪とならむか

マスクして交わす会釈も身につきて目力だけが鍛へられをり

白日傘かけ歩めば海沿ひを飛んでゆけさう吹くよ白南風

生姜、茗荷、大葉主役にならねども夏の料理は脇役大事。

・二首目の斬新な発想、四首目の詩情、五首目の含みのある表現に注目。

うすばかげろふ

鎌倉 関口 静子

すつぱりと蔓にからまれ電柱は一本の木となり立ちつくしたり

木蓮の枝よりのぞく満月が真夜をいつそう深くしてをり

浴衣着の娘がコロツケ買ひに来る路地裏の丸七商店街

トランプのババ引くやうに感染すあの人もつひにコロナにかかる

三日前に終はりし選挙のポスターのニコニコとしてまだ張られあり

・既成概念にとらわれないユニークな発想が持ち味。

みどり・みどり 鎌倉 高島 憲子

知覧産新茶淹れたりわが知らぬ戦思ひてみどりいたたく
自転車に朝日当たれり早緑のこれから夫の漕ぐ自転車に
眼裏を洗ふがごとく新緑の山また山をバスに越えゆく

リハビリの子に添ひて行くバス旅の空につきつき咲く桐の花
山に入り山を分け行くバス旅の空たかだかと桐の花見ゆ

赤錆の付きたるバスが乗り継ぎのロータリーにUターンする

・一首一首丁寧に拘われた感動を通して、作者の一途な生き方が見える。

遮断機 福岡 中村 かよ子

遮断機の前に佇む茫漠たる思いは短い時間のポケット

遮断機の下りてしばらく待つ合間迷い人なりここでも我は

遮断機の上りペダルを漕ぎ出せばあるはずのない海が匂いぬ

いなくなる日を恐れつつ飼いきたり飛んでこそ鳥今飛び立てり

飛び立った鳥の残した羽の色何色でもないことを知りたり

六月に泰山木は花開く地上を捨ててただ空のため

・「遮断機」は暗喩か。現実からやや浮上したところで詠まれた歌。

凶弾 東京 西野 美智代

繰り返さるる銃撃場面の衝撃が忘れてならぬこと忘れさす

その命赤木さんとて変はらぬを凶弾に逝き英雄となる

マスコミは心肺停止の四時間余 妻が着くの待たねばならず

一度だけ握手したことありまして桜見るたび恥ぢてをります

被害挙げ武器の供与を呼びかけるゼレンスキーは正義の象徴

戦ひの痕跡がなき一万年 かかあ天下の縄文の代は

・軽妙なタッチで世相を描きながら、鋭く突き刺さってくるアイロニー。

崩るるなかれ 川崎 松田 恭子

「クーラーも家具もつけます」広告は売れ残りたるマンションの部屋
夫の車手放しし後の駐車場舗装のすき間を占むる雑草

助手席は居心地悪かる慎重な私の運転けなし続けて

風呂の戸の隙間にのぞくものあり何かと見ればあらくさのつる

風呂の天井に雨じみ黒し私の生きてる限り崩るるなかれ

「ねばならぬ」となれば運転重荷なり食材買ひに洪々と行く

・身の回りの綻びをユーモアを交えて淡々と描き、哀感を滲ませる。

母の心 川越 満木 好美

この頃の母の心はどこにある今日もケータイ繋がらなくて

通院の時だけ会える母が今日茶色のシミあるベスト着ており

番にて塀を歩くと聞く雉が今日は雄のみふるさとの庭

舟着き場にカワウが羽を広げつつ乗っては降りる人間見てる

いつしかに電車の音も絶えており風鈴だけが遠く鳴る 真夜

非業の死に桜見る会、モリカケは水に流して献花する人

・施設に暮らす母の生活に手の出せないもどかしさと切なさ。

作品二、三特選



(十月号作品から)

千々和久 幸 選

〈作品二〉

新 盆

柏 江 口 絹 代

抜け道の無き悲しみが巡るとき酒呑めぬ我はポツキキ囁る
この夏に出会いし人の懐かしき夫の新盆の近づきおれば
あさがおは深き藍色どなたにも暑中見舞を書かず過ぎにき
ひもすがら寝てばかりいる家猫が夏休みの来て学校に行く
両音に紛れて猫のつぶやけり「婆のあつかいはむずかしくつてなあ」
母の家に隠れておりし夏が来ぬ鳳仙花の茎に蟬のぬけがら
・悲しみをユーモアに変えて健気に生きる歌人の強靱さ。

○

鎌 倉 小 原 裕 光

着メール「怪しい者ではありません」これは怪しいとすぐ削除する
早暁の友のメールに起こされて寝る間ありやと返信をする

カンパニユラの揃い咲きたる青き鐘朝の風に音なく揺れる
優先席へ辿りつきたる老婦人若者の間に小さくおさまる
一%の開票率で当確を伝える速報をあやしみて観る
農地にも地雷を埋め行きしとう非情ロシアの兵をば憎む
・健全な良識から突出した世界をも視野に取り込みたい。

黄 揚 羽

横 浜 庄 司 健 造

縦の木は緑の日傘思わせてわれは散歩の汗をぬぐいぬ
五百年のケヤキの根元をゆうゆうとふた回りして黄揚羽は去る
広ごれるコロナ禍の下浮き雲の崩れるままをながめておりぬ
子に負担かけずに老いたい思いつてなぜかさみしい夏の夕暮れ
こんな日も雲湧く空を見上げてる明日はきつといいことあるよ
うす紅のさるすべり咲き遠くより黒揚羽きてたわむれており
・三、五、六首にある時間の流れは新たな展開を予感させる。

風 の 詩

取 手 田 中 あさひ

はつなつはそよそよ、あをあを、ふつくらとほらやつて来た空にも地にも
そよそよとメランコリーを青空に撒きながら来るはつなつの風
生きているって囁すること、かくされた悪を注意深くこぼむこと
われの名と住所を声高にいふはドアホン前の宅配オニイサン
禁足に倦みたる耳へ全開にしたる窓より初蟬のこゑ
「風の詩」と名づけて見るや棒杭のさきの藁色の初とんぼはも

・自らの呼吸と言葉と美意識で日常に彩りを与える。

明宝ビルへ さいたま 松 沢 みどり

十二時のチャイムが鳴れば早々に仕事を終える第一土曜日
今日だけは一番先に退社する「よい週末を」などと言いつつ
私鉄からJRへと乗り換えて目指すは新宿明宝ビルぞ

新宿駅の改札口が西口か南口かでいまだに迷う

高層ビルを見上げればこゝは海の底さかなの群れの一匹となる
居酒屋の「旨い魚とレモンサワー」の看板に惹かれつつ通り過ぐ

・妻、母、会社員、歌人の一人四役。やれば出来る天晴れな見本。

白き時間 行 田 安 田 恵 子

本を読む夫の傍でレース編む白き時間がゆるりと流る

花の名のわからぬ花のうす紅色は迷い来たりし少女のごとし
病む夫をおいては先に逝けないと思いつ今朝のこの小競り合い
壁にある木彫の面の空洞の眼にわれは不意にとらわる

母と子の商う小さき食堂に売家の貼り紙シャッターにあり
梅を漬けべり酒仕込みこの夏の暑さにわれも発酵しそう

・二首目、四首目にはすでに詩人の眼が刻印されている。

〈作品三〉

検索すれば 鎌 倉 小 笹 岐美子

夢の中の彼の人今もやわからかに私の名前旧姓で呼ぶ

戯れに検索すれば現れる恋した人の老いたる姿

やさしげな妻や娘に囲まれて よかったあなたも幸せそうで
旧姓の名前で検索してみればまだ何者でもなかった私

ツバメの巢防犯カメラの上にあり大丈夫なのかツバメもカメラも
・記憶は思い出すたびに書き換えられて蘇る、だから長生きが勝ち。

爪の銀色 川 口 川久保 百子

足早に通り過ぎゆくパンプスの尖った先に夏が来ている
佃島の小さな干潟のクロサギは都会の風に何くわぬ顔

Tシャツの茶色のしみは洗っても洗っても消えず今日はつゆ晴れ
チケツトはネットで何とか買いました頑張つて咲く向日葵の花

夜の更けて爪の銀色落としおり大雨警報出されたままで

・ドラマにでもしたい雰囲気之歌、このペースでひた走るべし。

○ 三 鷹 能 城 春 美

ありがとうずつと応援してくれて こんな文末読みたくなかった
手紙にて前立腺癌嘆いても電話の声は朗らかなまま

白髪染めたことないよと言う母の八十七歳艶やかな髪
「アーン」して夕食の後の歯みがきに古い母はそろり口開けくれる

炊きたてにじゃこと刻みし大葉ませ白胡麻ふれば食欲もどる
・「香蘭」が月刊であることに気付けば、才能は一気に開花しよう。

金太郎飴

長野 道子

川沿いの簡易宿泊所に季はずれの蚊取線香が薄く漂う

命託す想いに書きし同意書の医師の氏名もわれも四文字

病棟に生ものは禁止窓際のシルクフラワーもケースの中なり

病院の空ことごとく見尽して浦舟町の界限知らず

密会の空気をもちし四人部屋血液の癌に誰もひそひそ

抗癌剤治療に先立ち前歯抜き山姥の顔になりてしまえり

モルヒネに痛み鎮めて眺めているみなとみらいの夜の観覧車

かつくんと骨髓検査の針打たれ息の根止めてしばしひれ伏す

骨髓血採血のため病棟の離島のような部屋に半日

火の色の骨髓液が点滴の雫になれり秋海棠のころ

妹が夜行バスにて見舞いきぬ光線殺菌ふんわり香らせ

ひと言随想

木綿のハンカチ

剃髪の頭に被りいる大判のイルカの柄の夫のハンカチ

十四階無菌室よりの退院に使い終らぬウエットティッシュ

加熱食に三月あまりを過ごしいて三陸のサンマを今宵は捌く

治療終え身の丈縮みウエストが消えてしまった 金太郎館だ

本誌令和四年四月号の近詠十五首として、市川義和氏の「のぶちやん」が掲載され、弟さんのために、肝細胞採取をされたことを知り、胸がいつぱいになりました。そこで私自身も、骨髄移植の日々をまとめてみました。高所の苦手な私が十四階の無菌室で、九月から十月までの一ヶ月余過ごしましたが、今になってみると、辛さより窓からの風景の方が記憶に残っています。遠景の海、近景の丘

の緑、空を飛ぶ鳥、夜景のきらめき……。今でも鮮明に思い出すことがあります。今こうして過ごせるのは、主治医の先生、看護師の方、清掃のスタッフの方はもちろんのこと、家族、友人、何よりも「香蘭」の皆さまの暖かなエールのおかげです。治療で髪が抜け剃髪になった時に、頭に被っていた木綿のハンカチは、少し色があせましたが、今は首元に使っています。

村野次郎への旅 (152)

大正期の「香蘭」(十三)

千々和 久 幸

前回のところどころでちょっと触れたが、「香蘭」大正十五年(1926)年六月号には、後に選者となる冬野木枯(清張)、石野正太郎、横山信吾が出詠しているので、一通り目を通しておこう。

冬野木枯(清張)、石野正太郎は村野次郎と同じ作品欄(言わば作品一)、横山信吾は作品二欄である。

若葉

石野正太郎

- ① 屋敷木の若葉にこもる夕風の木梢しぬぎて
アンテナ高し
- ② ここにして見おろす森の梢若葉さやぐあたりにアンテナの見ゆ
- ③ 草原にあそびたわむる童等のあなかるがろしみな裸足なり
- ④ 草原にかけ足競ふことも等の足うらは光る草のあをき
- ⑤ 子にまねてわれも下駄ぬぐ草の原いまだ裸

足はつめたかりけり

- ⑥ 山風の若葉どよもす音遠しここの裾原草光りつつ
- ⑦ 若葉の深きをくればあはれなり木の間すかして一つ炭がま

- ⑧ 崖はたの若葉のしげり深ければ山藤の花房長にみゆ
- ⑨ 崖腹の藤を採らなと伸す洋傘の足場あやふくとどかさざりけり

- ⑩ 對岸に藤の花房吹き並びうつくしきかも風にゆれるを

晩春

冬野 木枯

- ① 雨のあと日の照りあつし散りそめし牡丹の芯に蟻のほりある
- ② こたつとりて部屋の廣きもうらさびしこよひの雨の音しづかなる
- ③ あたたかき雨の夜かも遠くなく蛙のこゑは耳になれたり

- ④ 夕より雨ふりそめぬ軒の樋に雀あるらし羽ばたきにけり

- ⑤ 若葉風ふく日や歩む素の足にたたみの冷えのこころよろしき

- ⑥ 授業時間となりて静けし十姉妹小使室の籠になきある(小學校にて)
- ⑦ 小使室の窓の硝子より裏庭の卯の花白く咲きゆるる見ゆ

- ⑧ 日は明るし小田の水底に芽をふけるいとも小さき稗の粒見ゆ

- ⑨ おたまじやくしがあそびるにけむ足音に田底の泥をたてて逃げにけり

- ⑩ わが庭にたまたま蜂は來てとべり春の景色は過ぎにけるかも

- ⑪ 田の土手の青草のびて春はおそし風に流れる石ばいのにほひ

海沿ひ

横山 信吾

- ① 窓さきの蜜柑の葉あひかげりくる夕の宿に風呂待ちてをり
- ② たひらかに風きて照らざる海の上高山の煙低くかかれり
- ③ 眼ざむれば板戸をならすあかとき風の風にかそけく雨交るらし
- ④ こまやかに今朝は雨降る海の面に暴風あとの泡のかたよりにつつ

⑤雨しづく傘に落つるはひそかなれ木の間に
入りて久しとおもふ

⑥ときをりにほてる風立つ片山の草のいきれ
をさびしみゆけり

⑦磯村の晝深くして道ばたに鹽鮭を焼く匂ひ
しるしも

⑧浪の音近くきこゆる峠路は下りとなりて脛
のけたゆき

⑨忘れぬし午餠に代ふと掛茶屋にひとり卵を
わが割りてゐる

⑩木の間道立とどまりて汗ふけり海鳴り遠く
聞えるるか

⑪枯葦の明るき道となりにけり先ゆきし人見
えなくなりぬ

⑫枯葦の夕日みだるる風のまに人の聲するは
うらさびしけれ

ここに石野、冬野、横山の三人の先達の作
品を並べたが、いずれも十首を越える力作で
ある。村野先生の出詠は例月六、七首だから
その意欲の高さが窺えよう。

こうして並べてみると、横山作品が最も彩
りがあり、石野作品は手堅い。冬野作品は虫
や小鳥を配してローカル色が豊かだ。

石野作品の①、②は若葉にアンテナを配し

たものだが、これはラジオ用のアンテナであ
ろうか。ネットによれば日本で最初の八木・
宇田アンテナが山形県酒田市と飛鳥間の一般
公衆用超短波無線電話局に設けられたのは、
昭和8年（1933）とあったが、この作品
との関係は詳らかにしない。

③の四句はいかにも子どもたちの軽やかな
身のこなしが見えて印象深い。また⑦の「炭
がま」は粘土・石・煉瓦などで築かれたもの、
と広辞苑にある。

次いで冬野作品の③の蛙、⑥の十姉妹、⑨
のおたまじやくしは、終生信濃に暮らした歯
科医冬野医師の面影を彷彿とさせる。一連に
は後年の飄逸味を感じさせるものはないが、
懸命なデッサン振りが偲ばれる。

横山作品の①、⑨は景物より主人公（作者）
を表に出して、どこかに文学青年の憂愁が窺
える。景物のなかに自愛の感情を溶かし込ん
だところにロマンの香りがした。

わたしが「香蘭」に入会したのは昭和32年
（1957）だが、まだ選者制は採用されてい
なかった。その直後に選者制となったが、村
野先生は選者として表に名前は出されなかつ
た。記憶にあるのは深野庫之介、冬野清張、
横山信吾、須田伊波穂、大貫迪子、後に竹内

忠夫（佐藤忠夫）が選者だったこと。
石野正太郎さんが選者に推挙されたのは、
ずっと後のことで覚えてはいない。本社歌会
や全国大会でも会ったことはなく、その程度
の縁であった。あるいは長い休詠期間があつ
たのかも知れない。

わたしは横山信吾先生に選をお願いしたの
だったが、村野先生から「なぜほくのところに
作品を寄せさないのか」と詰問された。「で
も先生は選者として名前がありませんから」
と咄嗟に答えたのだったが、「無くてもきみの
作品はほくが見るよ」と言われて困惑した。
往時茫茫である。

横山先生は結社内の規律や慣習に囚われる
ことのないロマンチスト（自由人）で、やん
ちゃな慶応ボーイだった。選者の中では横山
先生だけが酒が飲めた（！）。酔うほどに気分
が乗れば、北原白秋の「さすらいの唄」（大正
6年、中山晋平作曲、島村抱月・松井須磨子
の『生ける屍』の劇中歌）を独唱された。

横山選者の歌のロマンの香りもさることな
がら、一首には独特の屈折があつて、編集部
の柳沢恒吉さんがよく口真似をされた。横山
選者と竹内選者の「ただこと歌」は好対照を
なしていた。

令和四年度 香蘭新人賞発表

受賞作品 二篇

「立体画像」 江口 絹代

「夢のつづき」 松沢みどり

【経緯】

* * * *

○作品募集掲載 令和4年本誌1月号

○応募締切り 令和4年7月31日

○選考会開催 令和4年9月29日

○結果発表 令和4年本誌12月号

* * * *

選考委員

千々和久幸

桜井 京子

丸山三枝子

渡辺礼比子

令和4年度香蘭新人賞選考結果一覧表

- 各選者の1位を5点、2位を4点、3位を3点、4位を2点、5位を1点として集計。下表は得点順に掲載。
○以下の結果により、令和4年度香蘭新人賞は江口絹代、松沢みどりの2名と決定。

題名	氏名	選者名				計
		千々和	丸山	桜井	渡辺	
1 立体画像	江口 絹代	5	5	4	4	18
1 夢のつづき	松沢みどり	4	4	5	5	18
3 晴レルヤ	小城 勝相	1	3	2	2	8
4 ストロウの袋	川久保百子	3		3		6
5 囀る鳥	小笹岐美子				3	3
6 そろりと近づく	佐伯 弥生		2			2
6 緑陰	澤田久美子			1	1	2
6 口紅の色	安田 恵子	2				2
9 百日紅	庄司 健造		1			1